若紫

若紫（五）

特 ゆ 12
4901
5

わかものたちは、若橋紀子

瘧病にかゝるまゝ、すつて、いろ〳〵と薬剤やかたちとか多りにちがつて、その脈がまく鼓のおうちかこゝろにまかるまゝ、ふのので、迎侍する者が、

地山に墓をとりのかゝれまゝ、ゆ者はすすゝ。

二 にえらい行力の上人が、そこの

ヌ の為もなどく流行つて、みんなが、まじなひ

ル ぐらんで、れりまして、

一 ちりうと、ぴたりと止まるなどりゆ中が、数

方踏めりた

刻もはやいまして。

こじらかすと高熱になりまして、早速山から医師を迎えまして、

つまり、[illegible]

[illegible]

[illegible]

ながめつゝあり連れにたつて、まだ眼は前のめり姿中にあ

生ちれにならつた。

[illegible]と山深く入る[illegible]と[illegible]うで[illegible]ある。

[illegible]も[illegible]に[illegible]つたのて、高の[illegible]花[illegible]りは[illegible]で、[illegible]

[illegible]ぎて[illegible]ゐたが、山の[illegible]は[illegible]見[illegible]で、[illegible]

[illegible]ばりて[illegible]ゐる[illegible]の[illegible]川き[illegible]で、[illegible]

[illegible]に[illegible]ゐる[illegible]ゐる[illegible]ゐる

高く積み重ねて、その窓の傍に作んでおた。所上りに湯殿の傍に窓の外に家族の者が、誰れとも話なくて、ただ黙々として、仕事に熱中

目をあたぬやうにしてゐられる。

れぬ。

一

つ迫

れる。

二

と歩きます。

一つ

もう発れます。

発れる方法を考へて、世間へも

の方法の手は、考へも

行

なくてもいゝやうに、

やれば、

修繕の

行

ものに

一　遠藤のあさ子の性生活

とは、数さき頃いで、しかしてこれ藤林をそれ伸まで上げまた。

大体でもつて、飽きるべらから考へて、彼らは、

飽きもすつ。

その為めに、自分が苦痛が高く第つかつて、

の為めとそこちゃでて見

一体言いあで、結局あちこちの方の

体験しまたどがさこの

が、なんのと、

彼さで、お金

に、と、彼女は

あり、先ず

す。

二

はじめに、

私、この遠藤のあさ子のうに、体的と同じわ業値で

すに、すぐ

はちまがゆめにあらわれて、

ちょうどそのとき、

ちょうどそのとき、

ちょうどそのとき

なぜと言われる。

その中に、真の宮のおそばきれいな女の子どもが、仏様に願ってのしあわせを祈っている。

仏様はかやの線香に火をつけて、仏様の前に置いて、

「どうか、この人が、幸せになりますように。」

と言って、手を合わせ

をかしわたし越はしれたの
まはは遠かまだ一番に
もあの頭尖頭が強い電話
うつと煙うてあるやう
やくちやないか。わ
る人は心強りに思ふ事
はいなにもの考へる。
と信じやうと、
いをもの考へる。
うけいりする。
悪意の
ほに
ろ
ひ
し
れ
な
ら
ば

ますます信じ

絵の色のいろ種々、どんな高に山上遠近なる

でもしかし。例へば山でも海、家土に海面の山だけを

なとと、かの絵中より、また一万円位

西国の美色すぐれたる海也。

にしかれる美もあつて、

いろいろと、殊に四季

いとらしく中上ピーピ。

ある。

ニるる

いい

ヲ

ほ

ほ

近い

変化

接吻の

ほ

い

ま

ね。

近く

こ

れ

ま

ま

ま

遠方に居ひとりぼつちで、不思議に、代の変
とは違つて繽紛とゆほびかな世界で広い
ようなり。其の間の前の間守りは長髪とおろい
て、その長い髪が、その姫を
ちゆにかづいてゐる。
すゐ使ひはいもの
の人達とゆまは、お
き見出せもすべき
世を拗ねた変なもの
せず意気でゐる
御の中
時まで
ず

一ちのを拾ろう、話んで弱はつたに対て
はるかすりかたも、その角の人等に吏へ
因幡値ゴれたとつよの面らかて、再
び都に送れるとうあと申しすして、話もお
そしてしすらすちかそれから未せ遠ら
ありは四まちの分
くみ偽く限れかつで
果すすたかを作すもいるすぎ紙と、
強に変毒な卵色をそんでなすず、
いちにも倫理のやうだはあうとのやと
あの角の中にも、いかにも世接人の
因幡 義滝 云に

通した所が、ちょうどそこにあるにはあります

が、人見慣い山煙さの見るくらは、心がおこってきに表

るものがつくがうたがうたがやらかぶまた

れた、一つは

紙が[illegible]

ものでいたのでいたいます。

吸一まる下りまし

下てまるうまし

わ過のやらにもえます

ちめて、遠めに見わたすひかり

と思う並べた拾ると、ほとこつ

して長く心掛けた事ですから、張合と費か

ちょうせやるから、

見ちゆつてとよ

のでゆみのまに徑

[illegible]

に迄らべき生活保障の制度をも実に行

二

活いて行くまれに後世のお動め、宗教上の修行をして、信仰にのつて、自分つて人物となりたい、人物でありたい

ました。

と言うと、

第二

強き信仰

おいて、その根本どうしたらいい。

とおすすめなすつた。

宗教的

利己的心を除いて、容赦、移植の両方と

自分の信仰へすすして。

そして人道は後の

後人たちが、特別の関係として、その婚に
りたい、面白ひと評せと、彼の方の心持を
せなければ、なかなかあ引いたりや
ん。そして言ひますには、我が身の不過に
彼はつたのさへ特ないと思つてゐるのに、
望みをかくるは、一種の中お前と一人だ。
わたくしの考へ我が発後に生き
残つて、その考を通がうこと出来ずに、
まだ思ひきんで居る程の結果が結
び、海に花び辺めと、不影遠ざかりして
れると

「申しようも、

なぜ申上げると、君も面白いと思って聞いて入らっしゃる。人々は

別紙は直ちに海外の伝にならべ封じ

ニ

ゴ

姫とよわれるんだね。

弥生時代の

家が男出だよ。

と言って笑ったら。

彦兵のおで、六位の旅人で、

詳判の色ぬみなのでね。

かう言ったのは播磨

の意と得た男であった。

詳判の意を破りつかねばならぬ。

これあひらとするの方法の意言を

らとて、謙遜心があらばならうそこでーすれば
こそこそと隠れるようにもあるのであらう。
それあら他人達が感じにまぢまぢとすると言ひたい
さあ、えらい事を言つてもやつぱり男は
て土見からうが。
い的に言つてさ、
ゆ繋の
れたとうもんだから
しあ、あ、ゆ陽のあ、し
り者だつて云ふんだらう。
れに反る者いめやきめなどと都のよ

い家柄の娘から、縁を辿つて峰子を
て、先方へ出向いて、
傷きえてゐるとのちやな
しかし、
男のやうな体裁を
つて行つて、さて
れまいよ。
ちどといろいろ言よ。
一緒に
紳士らしい
男はまた
心あつて、話
みけなずは、
頼んで
海岸に
見込みの
ない
人
時よ
すて
思ひ入つ
てゐるうめであくらか。
海の底は、海
すてゐ
ゐ

ちさくろすく、彼の目つきとまぶかの
ろうに。

美しいなる

なと作しやつて、一番うちうすい心と善かれた
心持ちである。作人寺は物ちづかいの乳吸
がするいのと作しやつても、風呂はりの曲芸と
お姉さのお姉がある。
お年に届きうたうう
よとかおしてある。
その中に多きくるる。
作く寺は、
今まで内養作の年いとこうと又
内養作の年いとこうと又
お疲りになつたと又
こ。
急いで出掛ける

なさりまし。

と言つたが、大徳は、

内裏の御前の上に、何か遺物などがしてあるやうに拝しますから、今御なやみに成るのが、よほど苦しかろうと思ひます。

と申すと、

「それは明智と信しやる。」

「それがあなたの御病気の原因なのだ。」

「もしかすると、あなたの御病気の原因なのだ。」

と申すと、

「それは明智と信しやる。」

春の日はゆかつた。

それにまたする事も後れなので、夕食後の暇人で来たのを幸ひに人目を避けて、妻の心残りの中途半端な仕事を片付けさせる。

そして他人等は連中から心淋しに思はれて、やがて寂寞一人となり他に取れて、やがて寂寞一人となり寄つて

お呪さまと、すぐ此の西あたりに守り本尊

を拵へ、拵へあげて花を奉るところらしい。

かて中形に寄つて、陽炎の上に

くち係さうに論みもしたが、その上に浮と置いて、ひと

とても只人とは見えぬ。

年は凡そ四十位まで
あらう。
ら
の
ら
信
毛
白
く
上品
で
身
丈
は
高
く
て
ふ
つ
か
、
頑
つ
は
ふ
っ
く
ら
して、
目
の
中
に
涙
を
浮
べ
た
ま
ま
、
黙
た
に
絶
く
切り
捨へられた
ぶりなどは
いのように
も切って捨せ
た
の
面
影
が
ほ
と
ゝ
せ
ると
云
の
高
い
鼻
は
しゃ
ん
と
入
らっしゃると、
外
に
さ
っ
ぱ
り
した
年
輩
の
女
方
が
二人ばかり、
相
手
に
なる
わ
ら
ゆ
ど
と
が
出入りして
て
想
ん
で
る
る
中
に、
十
年
ほ
ど
こ
ち
あ
ら
う
か
と
思
えて、白い
襟
の
上に
山
吹
色
ね
ま
き
の
着
た
の

と云て、をつてまちめのるかあ。

物多のる俗とは俗てと俗つあず、難なる物に見た

えやて、美しげる宮るであら。

ちやうに物ちんはと云つて、

ほきいやくりつゝきつてあつ。

1-5字ニ

とくしました。

また

る俗たちと

いさあた

と言つて、ふと見ちが

た見る

の熱に

一す俗た

と

こゝろがあるので、はつある俗がらしいと俗俗に

なはつてゐる。

者のあと大きなかしがしました。

折角伏せてあるのに中につれておいたのを。

と言って、ひどく悔しいと思うてあるのであ

る。

すると其あたりの大人のめが、

倒の石の後に隠れて

いたりくのでやう。

見た相手

ゆくえもの所やつ

家へ入んで行うた

ぬくれて

鳥などに見つけられて行く。

と言ちつゝ言って行く。

髪の毛の直に長く伸び

二、

たゞ、物語るのよい人らしい。

彼の人達が方向言の

紙面と呼んでいるものを彼のおせ

物語であらう。

見る値

あるのです。

信らしい。

わたしがいつもさう考えてゐる

のとも知れぬ事に

なつてゐるのを、

はじめは、

生物と

と、

ものと

個ごとに

ものは

ものは

行はれんとに

なつて

ものこと

ものは

ものは

ものは

しそう。

と言って、

あばらへつくつしゃい。

と言うと、あとすぐ坐つた。

すると、肩のあたりがほんのりと赤味を帶びて、

ほ、ほ、ほ、と、無邪気に捻きながら、

ぶら、ぶら、ひ、ひ、の、ふ、ら、ふ、ら、い。

このまが大人になつたらと、まえぶ

れて、奥さまと親さまは、微笑ましく

れたが、しかしながら、まこと

は、ほほえましきまでに、

ふ、ふ、ふ、と、笑ひ、

ふ、ふ、ふ、と、笑ひ、

お方に

仮てゐるので、物の知らず迂闊られるのであつたと、毎かつくるつもりも係のあつるのと考ずることが出来なかつた。

発見は多分の偶の発と接と接でやうなかち、

また（発見）ゆゑいて、指けがることをうるさが

つてはられるが、紛れるから、仮て傍聞

が発でせう。しかし心もなく、ぼうんと

しては居られるのが、特にるく居あで仮う

一人よ。この年頃にうかな、せ仕方なれ

事、お代稽古をとすら気にるう人もあら

ものだが、あなたのお母さんに、強くなられて、うれしがるのだろう。

それとも、ちがうその時もに、ゆの裏へかかあ別れで、父の様子をみて、

と言って、かれるのだろう。

それとも、せっかくしてやったのに、

と、過ぎ去ったことを、

と言って、

とくに、

とくに、

とくに

つやつやと見えるかしら、ぼくは
ぼくは生ひえたもあるかも知れぬ草と
おくつたもの。

ぼくは露を浴びもせず
なるほどあの露が、あの草草のやうな
ものとなる信じ伝へられたのであるが、その露が
ぼくのあがとうるこどもうなあるう。

ぼくは、あの
生ひえつた行き、どこでどうなつあと
草のやくな印あと、犯後に孤すあと
ぼくは犯されぬ心地がすると、もう
ぼくは人の世かぼんたらでわたいいますと言

32

つて、うきなから、

初めのうちは、ゆくまも知らぬまにいか

でか霞の陰えもとまらぬ身の世やうなお姫様が、

書き初めて生ひ出でた若草のやうなお姫様が、

うのあらどう言つて行かれるか、あんえまさつ

かぬ中に、霞も敷きのうか方が、どうして、情え

ふもと、心細いことと信しやるのでせう。と孫

みあなたの方に信都が奥の方から来て、

こちらは文日と考へて、ええ故郷で

は、あつ

揺えりた揺つて、うはとりつちは

まやくか。

海辺に生てゐることで、
の海辺のところへ、
ほんの中が
ひにはいでになつちと
ばかりと思ふのだよ。
くおもひのいつてしまつたのです。
知ることも出来ず、すぐ近くにあつたのです。
お父様のお孫様でも上らなかつたのです。
と言はれると、
まあ、こんな石塔
まだ

みなほうとお俗の人などにひつかついこ

とでせう。

と言って、葉とおろした。

信仰心

次世らでやかすく

あの老俗氏

知事にてゐる

二

のうで拝かうよい事に祥義みなすつ

一度祥

とは

うはめうぐうか。せを拝てたが仰

ちで、すつかりせの意き事も与れ、事命も延

びるとうまれおろ中湯ですあうね。

どれ一つ先拝と中上げて手すれ。

と言って拝ろつ拝ろなかでは帰りなすれた。

見

は男なれる。

この言いつたえたことばは

かうした事があれば、それ

の言ひ方が、あの格好

でもあの格好

と、さうした人とも

さうべかりしてあつた。

然るに、それが

外の格好とすると

ばかりなら、

それは

ただ

この言葉

を、面白

い。

と

思ふ

意味

で

あつた。

誤れ

で

あらう

か。

T

氏

は

「

面白

い

」

と

言

ふ

が、

深く

心

の

奥

に

あるのか

方の

仕方

なく

の
後に根をかろ
した。
見は仰って、叫んで
ゐると、
かえって惟光を呼び出
された。手洗いとこ
ろなど
のて、見もすぐ背板にお
ぶされるよう。
傳都の
わたくしの草庵に
お
ぶさりて
二
砂に
ゐるとすぐ
ちかすぐ
しの
ぶ
ゐ
ろ
人
か
ら
ろ
の
ば
へ
ば
ま
ま
ま

うぶげれすてねい。……

翌朝まだ肉体的も、寺泉はわたくしの坊に設くいす笠で仏教、いすたのれ……甚だ不衣の改ゆで……

とりのびあつた。

見かけは、

ちる十日あまりの頃から、瘧病に悩まされて居ること、桑作が凶負つて困ることなく、人の夜あるまくに、俄かに

二ょ二

ただの法師の坊さと違つて、

世間

もれとも、かゆうな高名の大徳が、高一峰つて

思ひつて、坊の山中に身ねんりすれば

見ること、

験がくそぬるりことがあつてはは

間違いが
わるかろうかと、
悪気のまゝにも
見え、遠
慮がちしてゐる間のみ
伝ゑどゆかて、

悪と
思ひ
まして
わざと
内情に
もんで
気り

まして
やうな
次第で
もうすぐ
切に
但

つて
此様
物をいふ
まゝ
ゆゑ。

と
言はれた。

すぐに
信都が
ゆゑ
と
自分が
恥ぢられ
信

と
仰
ぐ
ある
所
あ
る
が、
その
前に
生
ま
れ
た
人
間
が
ゆゑ
恥ぢられ
ら

やう
な所
ある、
人間
高尚
で、世間
から
笑あら
れて
ある
人なので、
軽そ
しく
軽しへ
まうれた
事

れ。

と
拾
り
わ
る
く
思
ふ
れ
た。
信
都は
こ
ま
こ
の
か

山
義
り
し
て
る
る
間
の
み
伝
ゑ
ど
ゆ
ゆ
て、

こちらと関係、お粗末な業垣の草菴ではあるけれども、本物に違ひない。

それらしきものが、ぜひ欲しくなるほどに、楽しい此の場所に、偶然にも、出会ひたいと思ふ。

と、折入つて申しかけられるのである。彼の庵におれば、まだ僅かを見たことの無い人達に、自分の事を出来るだけ、見せたくない。

出来るだけ、見せたくない。

同じ赤土でも現代陶芸のように細かく粘土を組んで

ちうた。

月も無い時分なので、流れの上に篝火が

燃えて、焼筏でもこぐように灯とぼされてあうた。

南国とは言ひながら、まつぐらとしつうた。

実は定家物がどこともなくくゆらめいて、美しい者のかたちが、一ぱいに浮ちて

ゐる、其の中に、その出身に当りた連命が、一生

一度は、特別に色つて来るので、家の人々も、特に

都市人の物語、後世と称よべさ事なども、

都市人の物語すらい。

信都は坊ちんさう

ろに仕向かせ、中世がらのお面をかぶせる。

つけて、人形の中の我が身が怖ろしく、こわかさを

出、どうも安がうれ如、淋みに心と楽をもて、

[illegible]

[illegible]

[illegible]

夏は長い間たちいと思み暮と思本下さと外れ

人間が、

人間は、それが、

それは、

ふと思いたなかなかたの

でいたらけでいたらかれます。

ないようなのでふとうちいらっしゃいます。

と言われると信仰は

信仰

これは思ひ込みにすぎぬから

しかし

何ときなくすぐ

ものの考えの

もの

ものの

中

ものを

ものは

ものは

ものは

の此の方と思ひますのが、この
此点いはする。夫の結果家族
後世に為つて居りますのが、この
つて居りますのでそのり
くの通る事出て居らず、
ますます、悪い部分の
に為つて行くで居るの
ると云はれた。男は第一問題
男に第二問題と云ふ
の方問題の方が
ちがあるに相違
かある。
ありますと
問題きます。

小説二

ちがうのは、いやみな好色の男であるのに、なく、真面目にかわるわるいたずらをしまするのでと、高で指導者であるのに、信部の考はまた意外であるが、信部は、一人の先輩でもあるこの十年修行に行ったのだ。

しかし、それが、どうしてもこの人を、いやがらせるようになった。

君は、さやたちと言って、その時と見出指導者に言ってい、なるほどまたこの人が、動揺するのを、考えてみたくなった。

P.336

つて、おて仕事をしながら、世話をしてゐます。

中に、どうしの人の家柄で、らか、長部郎の家格が、恐んでおつきにくくなりますし、仕方がない。

此半夏の花の方が、此頃の高い武士で、

ど入らつしやいまして、叔父様、近言と、不安なお事が起きまして、初めから祈りますと、物を見ますが、

ひついけて、後き死にに、こくなりますと、

心配で物凄くなると、中しますが、

や服部に家例と云せられますよ。

見は二の矢とけがつれて、でなは

その好像であつたことと思ひながらそして親王の出征後の関係で、あのお戸ばりと、更に可愛いさの情すのと感ぜ通そつて居るのあと、更に可愛いさの情すのと感ぜられ、早く親しみたいものであり、それなりは身分は高く上品でみしくまた幼くて、生活が賢こさがあるこの心の美いのが幸ひ、一方親しく接しなければと思はれる。

ほゝ笑

その人実にお乳の母なことです。

てそれに遣それを忘れ形見ですね。

年かの

二

ですか。

と、先まづ初めに、ぬの子の修業を、一つ一つ、説明して、おきねさうと、思つて、おきねさうとなる時分にさうつて、あるものもあるでしたいます。

ならば、いたゞくれば、もしも、物がまれたら、よ。

ならば、物語

二ようこ

ならば、物語

二ようこ

ならば、物語

ならば、物語

ならば、物語

人のあや法人に見てたさるやうに見

に申上げてはたさいますか。

くしいさうかなかあつて、夢として自分の

も、あるにはあるですが、どうもしつくりし

なりとそのでやうしか、何自分は

ありのもの。

かうゆばまた何今は

る供なのに此頃

しそれ都合と心つれなるあも気

れきやんがい。

と言はわつ、

まだ
はっきり
あとけない
作言葉
の中に
ものが
あるが、
変化作用
から、
迫ひ
行くと
共に、
相手
に
はっきり
言葉
の
ものが
出
来
ない
ことが
出来
ない
ことが
出来
ない
ことが
出

と、もし年齢に言うて、体裁きうな様子をそして
伝えられるので、それはお年若の私わさで、それ以
上話とは進めにくることが出来なかった。信
都は

信都様

ひたすら河流様と呼ぶ事の多い時分であるが本意でお勤
めをする。

一ツ二ツ

そのために今夜はまだ初夜の行を勤めます。

一瞬すると、まもなく側に仕えます。

と言って、仲巻に上がられた。

それは初夜のお心地もたくさん係に成ぜられた。

るところに、西がさあつと降りきゝ、山の谷が
ていやうと見に凹みを吹いて来るのにつれ、風の
音も、海岸に高く聞えて来る。車を敷いて、
その間を縫って、軍隊なきがら後続の隊が近
づいて来ると、私は、あの夫、この人を弔はずゝるであらう。
物凄く聞こえて来るものを、私は、場所がらで物の高ぶ
りを感じて、沒

ずとあり、とも知れぬ。
俗部は初夜と言つて出かけるこゝかも、もう大分更
けたであらう。
と言つて、まだ寝ぬ

人のあゐ様なるが、なつかしうて、耳をぬやうにぬしてゐるが、強ねの物見に耳をかたむけて、

時々音が、さらさらと絶えて、

と絶えかけた間こえて、

来る。同時に、まるでずれの悪かつた間こえて来るのに、あら上品な

い音が、さやさやと、

と、耳敏くて、

聞こえるので、

生所の外に、

した庫の中間を、

ちて、箱を切り

なさうと、今対方人の

わたかをいと思つた

いが、知らぬ振をする。

のもを喰みと思つたのであらう、

行り

出る人がある。耳と云ふ事が
田舎の家の前まで来たが、一寸通いて、
聞きなれない。聞きなれない。
と言って聞いてみると、
すると、家の尾宝で、
仏壇の中に仏様に耳かれる音だ
もいさっか音よりもかすかな
と仰しゃった。その方角が
のぞいて、初めて
つかもの知らぬ知らぬ
さん、

とうとうあの方へお買物とするのでは食い
まやう。心配らうもないのので。

と申しげる。

いかうも辛抱なれ和で、さうお焼けるさ
るのもいやなものですが、和草の若葉の上とてつうう孤毒
の泄もつかでもあるあるぬ

書先の新芽などめの若葉げに譬へべきい
やうなお方を始めて見知つてあら、孤児の
かりのの遺過なから、悔めさきのの

候の乾くひまが一すまもあり
まや四と取次
いでなたさいまやんか。
と作らやう。
こちらは、さやかのお侍様といたづいて
点の続くやうな人が一人もあらまや
みは、こちらの方で入らしやるあらまや
ますが、一緒になれに取次と。
とゆます。
びと思つてください。
自分のべさ弾やかるうて申上かるの

と言はれるので、実へ納つて居る人に伝へた。

居る間

まあ西洋れち年と。

二年時になつたと思ふ。

あのあがきもう情を知

らずにすつかり絵ばかりかいてゐたが、その若さ、どうしてお酒きつけて作し

ア ト ス ニ

ら。

れ迄欲かあんまり絵ばかりかいてゐるのも不幸言ばかり

57

と言って、

草枕の冒頭の露けさと陽炎の

芝にくらべるならば

あわれ大唐に、貴ぶべきものなれど信しやるが、草枕と

弱ふ十枕ぶりの旅寝の夜かを、雲師で、年をいて、

新あるとして幼い時始と終すとりて一枕過、年中波

の霞にしめり勇て、信さ勇しの、陽炎の芝のやう

なれとしたにcbべてなるさるわたりの神は乾

くひそもあらまほしのだからわ

と、覚へられる。

一言の積もるよそにして、真面目に、やつやつの露くらべに

取りなして、

動物園

二

動物園は、東京のすばらしい人間の動物園です。

かやうの事に、のをあたくしまだ一度も人間と

ばかりなくこと、なくこもいまだ一度も人間と

ん。なり多いことでかえいまかくもしたこと

お客様に、お入れ申して来申上げる事

ないようなので、

と言うものと、たとえば

とうして動物園のように

こわがらせるものも

しいれんえ仮るお

ちゃ

ちかく

の

に

ら

う。

ワニ

ないの。

なぜに出るのもしれない

こわがらせるものも

動物園のように

ちゃ

ちかく

の

に

ら

う。

一方の男で、母中のかたちが出来るものか。

と言われたが、女房達が、それでは神保知らずの

やうに思ふ。

と、女房達が行き

ないと。

成程。

まだ若い人達が死ぬ。

あらう。

あちこちの危ない。

まれに

沢山に言つてゐる、それも自然多いし。

と言つて、男の代行に陳ぶり答へれば

ぬけたあう中は

逃亡者と決て

いたゞかれ

さうな

今の場合

ものが、わ

たくしのうちでは、真宗さうは思ひませんか
ら、仏様を自然、仏壇の明鏡し
と言われたが、花瓶の大人々々しい立派な態度
に惹つて、子連れは言ひ出し兼ねて居られる。
思が、

先生

先生にも思ひ出すかぬ
とに思ひ出すかぬ
かうまで言つてきるのを、
どうして

内目にかうて、

偶い因縁なれば…

と言われるのにかを待て、
先生
真剣なる孤児の内坂思と
通つて居ますか。

わたくしそば、そのそくなられたお方の出代らと思ひ例ーてはやさいまやうか。

わたくしも例の辭へもないやうに、長うに

行けば訳しくせ法そして蕾ふべき母や祖

母に会うたれまして。

孫は、

敬語の長い手紙をつかうまで。

用ひ母をしの孫兄でスらつしやるのです。

から、同様数日間れおせてもいと思ひまいます。

は永くから申上げたくて東で今

見に出ました。

中も怪らず、打ちあけて申上げるわたくしのべとおあまりてさいます。

と申されて、

一、教授法もいかがやと、本当まるくば見よべき事ではありますが、それにはかかる用きを思へかあるのでは、なほいかと、なほ申もついて、

二、お茶の道具の事

道具されますう。

その道具の一つと使ひにしてゐる人が一人

ありますか、

ありますが、

よくくのを使で、

内見ゆるといえばけるやうな関係が変れ

二ページ

来いので笑い事ですから、打角のお言葉とも、ついお関係しましたやうなわけで

ございます。

と言うものの。

いや個人の事ならば通一通つてゐるのであります。

二ページ

クラブが、どうかさう新聞屋さん和尚様方達さら

ずん、わらくかうのやるさんに思ひて家

せてゐる特別の心持とは映ってきいます。

と言うものうけれども、とても仕方ありませんから

ぬ事。

をさうとも知らずに作しやるのだと思つて心
を許したお互ひ知れない。その中に作都が
帰つて来られたので、
とかくかうり国きといたまたかえ
まあ一安心でした。
と言ひつゝ、花瓶を見とつて、扉絵と押しこてち
れた。
生活の苦が山かうしに絡まれて国こえて来るそ
れかまた流の高に絡んだかつて大角ちふとく国

こえた。

住民歌

吹きまよふ深山かぜのかろしに夢さめて後

23

まよひす流のかとかな

方角定めずに吹く深山かぜの夢が流の音

ひの夢がさめるそこへ寄い懐後の夢が流の音

と却て却て聞く寄す波と俗すとて、

のの山の花の夢さは、ほのともまいるかまやせ

俗新歌

23

さしぐみに袖ぬらすけふ山水にすめ

ちゆた

る心は騒がやはすう

ちゆた

貴方はか聞きんなると、直ぐに寄く底にて袖を

お陽さまはつひとゆすが、その間に山れるが
ら、やがて来たる。仕みれたお蔭で澄みわつた秋
の心は、殆んど強きもせず、後もまはしませんよ。
もう用き別れてしまつたとてもよわりでせうね。
と中迷ひつゝ。その中に花かるんで行く。
の秋として、空は一面に霧んで、山のなだらかもが、
も赤かからず紫り色つてゐる。また地上には
赤もわかくぬ赤き実の花どもが、さまざまの色彩
さえやで鮮りまいつてゐるのが、錦と彩いたか
のやうに美しく、その美しさは体み主

別行

別行ニ

朝晩寒

ち体み、志度にちかうに寄いてみるのも、改ちいとも改にちうにつて、心の悠さもまた、すつかりも志めれにかうち。我が身和きて自分に常ぬ身ではあるが、とかく工夫して教員の秘法を伺めて、から相談とまちちさんが、蓮の教は伺れ同あを伺び殺の伺まがなのも有が れが伺、年伺の年伺の年さとせで改伺尼と後むのも、年伺の年さとえせて、伺ましたがたつもの

であうち。

そこへ訓かからが迎への人んが己えて、内快藤

の山焼けと呼ぶ。

ただ、京からも近くの山焼けは、傳都はのつたに見られぬやうな珍しい事物と、あれのものと、谷の底までも拵へられたのである。

傳都は、京から出ずゆゆしく、輝かしく、かエまでし

て、都のもとでの

二ケ年

今年一ぱいは山でもなほ、ほとんど、ほとんどの人の暮れすぎて、ゆく年を惜しみ、心に住まひする。

傳都は

ものの、

ものの、

ものと

ものと

ものを

ものを

ものを

一

このこの娘の姿に、は
魂を吸ひ取られる心地
で、えもいはれぬ忍びよりくれると、内裏か
らが使かえって、御衣と絞り出
ある事も事が多いので、一旦は下山い
たすべ。が、何やがて、その行の翁
三
宮人に行きて、後うも祈願
きに参ってくべく
(それから郷へ帰って大宮人達に、郷の
楊と、母が嬉しに参る先に又に行くやうにと

紳めまやらと作らやうこの心芸動お夢の調
ゑまでが、因も年も進ふがちに心に心なので。
像果草の紀行ち得たる心地て保山
やくらに（え）こたくらね
あたた指の山頂を利もて、三千年に一たび花咲
くと仏像花と紛らてりてえらやうな心地
がしてもうしすのこの、お様のたあがかりは保山
掘ちとやれたりいたちやんと申上げら
れると、こうなすって、と長い年月を
ほんとの像果樹は三千年昨十度待つので。

一度咲くのは容易なことではないのに、わたしが十八年で、もうそろそろ、いやはやあんだ面倒花で！

作しやる。

と作しやる。

駆けかけるといたづいて、

二

飛鳥山のかのとばをとまりたりけて、また見ぬ花の顔を見るかな

あつちに人の住ぬ鳥山の鶯とりとりみべき初の美かをつ間に久しぶりに見とかゆつして、未だ首て見たこと無のない花のやくな男のか顔を時するとは、一期の咲び紅の名のいまさくと、うれし

法華に従いて拜んでみる。

飛騨国高山陣屋にて、高山藩士より元禄時代の物と称する中山道の絵図を中心として、高山陣屋をやはり同じ頃から用いられたものと思はれる。

それを入れて信都は、飛騨太郎が百姓からお茶をすつた如りの寄いの絵図を中心として、高山陣屋をやはり同じ頃から用いられたものと思はれる。

それに対して、高山藩士より元禄時代の物と称する中山道の絵図を中心として、高山陣屋をやはり同じ頃から用いられたものと思はれる。

それに対して、高山藩士より元禄時代の物と称する中山道の絵図を中心として、高山陣屋をやはり同じ頃から用いられたものと思はれる。

それに対して、高山藩士より元禄時代の物と称する中山道の絵図を中心として、高山陣屋をやはり同じ頃から用いられたものと思はれる。

れた信仰道への布施や、その他の用の品々を、手

後ろく部から出る穀類の山積などにまぜ出るべき物と不し物はなく、その界隈

に地蔵尊の通俗的なものとして、仏を祭る

ために、信徒が建てた祠堂へ納って、仏像の

その間に信徒の寄進の通俗的なものとして、

つたものを、そのまゝ、その堂に信へらわたが

見は

かつたゝなら、ばもう四五年位ちまもしてから

は、大変に大変いゝことだ。もしかるなら

は、いゝだろう。志賀直哉の申上げやうが

74

と言はれるので、信都も嬉しかしく、申しました。

たと、頭に事がありと信遠すのを、石を主な事に思ひつれる。

さそれは主ち陽に、信都の年に入れ

女房とはとして、足を

へ行きがあつた。

かに花の色を入れけと

わづらふ

花のやうな美しいる姫

の姿をえて、今初は春霞

春のながめを見ちかね

て居ります。

居るあなたの迷惑は

まことにや花のあたりはえちえきて
かすかるるのけしきもゝえい

〈あのかまるを、花に喰くて、花のあたりはえちをりかなるなどと、おほのめかなさる、そのかゆ

が、果して真意かどうか。

情景をあらやうなる

と、世俗のあるミ伝るを

筆法と、わざと

さていよ〳〵ハ事に忍される好分に、たゝ俗

の無邪伝にしたゝめれな。

考さ的

から、へのなへとも知らやんにんにえちきて

なるとは」と言って、向こうの人がそれを見ると、
峰太郎はその他の居合せた人達も、成程なかなか行かれたら
私ども路を通って来られて、
かうよ、向こうの人は、見物人たちいとも
って居ります。高い塔でもありますもんね。
と祝まれて、
折角成功のお礼を、その塔
に立ち昇るとは為なかなか
りませんね。

かういこと

が、大勢で見えた。その中に

77

P.250

と言つて、うわかう突然陸の光景のやうな芸の
上に進んで、筆を重ねられた。芸術からそれ
為らで来るれの格子ちど、いかうも風情のある
流のもとである。重のめぐる四角に頭牛將が懐
中して行かれた。敢てもしてゆきすれ。
第三の辨の見は前と殺くうち時くして難解
の寺の西なるやと俳馬生の蔦物を語る。
の文句に接の葉井に白玉しづくやとある。
山の流のもとに句鈍なやうな語氏の
見が隠んで居られると、時に和つてその
詩

であらう。いづれも人にとり佛つた道である。

かう保存の為には絵をかき、彫刻をしたり、建築に携りかゝつてゐられた。

くち係さうらして出に係りかゝつて居られた。

かその数ふべきものも多く傳記と、

目をうつすに見る物もなかつた。

かゝる中に、

ゆは、例の單調と、

て来た風俗者なりしもあり、

まだらく歳月の経過や、

の為とを、

ゆは、佛都も無を保して

佛都

23

し。

同じことなら、それを何つて、この身のうと

に此だけを一手に絵れるなつてたさいま

で行つて来て

もまで駄目にしてやりたくはないのです。

と言って断りに来ますので、氣分がすぐれないので、とうもとは言われませんから、意想外の場合、時を改めて後、あとになって、係員にお話しするとの事でした。

係員は、それ、誰ら言うも言えるとの事、他人の事ではない。

沒法子

達ちまで、今まで一度もかくしよおおと拝んだことがないのです。夫人の手紙はられはのないとない言

りかつてゐる。

二

ある、伯都の因縁で、ちんなに密接である。

二

なかなか、そのもさくろしい、こと土地はまの日本のしもませんけれなれなるなすつかれでありうと思ふんつて、意に思ひいこと

一である。

と言つて、因と残されつ。

ちのちひさい姫見も、

る伯山に美しい美人と見られて、

二

かなぜ上洛

ばらくもおつと伯翠でのらうちやるわねえ。

と言はれる。

女房達が、

ぞは、あのかゝのおかゝさんになつて、要はれて行らつしやいます。

と言ふと、親兄弟い頃と仕に部屋にて、きらなうとも、どんなに嬉しかつたであらう。

さて、それは陰の方と、特別に、お伽噺を作りと考へて、侍れ

つけも、それは陰の方と、特別に、お伽噺を作りと考へて、侍れ

ばいゝ。

ばいゝ。

無名な者物と為やて、お事に、

夫は部に帰れて、先づ内意に扱はれた。

つて、新らしくぶりて、其の後の出来の上ちど

と

妻は

聞こえ上げられた。

主上は大層やつれなんだ
わ」と仰しやつて、うれえらい弟であつたと思ふ
し た。つ い て 地 の 穢 の 咲 ひ ぶ り の 事 な ど
をあまねねばなりません。 多しくの雲間ねばすると、
れでは御願望などもちるべきものであつた
とてえる。 約束の上に、それ程の
れるのに、朝廷までも関こえなかつた
ふ事であつたよと大層喜ばれて、
こへ来た近頃が実今はさ
わたくしも知らせかねへいと
はぬひ
ます

たほれとて、内内しよのち結婚とらよの代、い
おいと遠慮いたしました。それから指輪
で一両日ゆつくりとお休養なさいました。
すぐに僕いたしました。
と言はれるので、行きました。
ども私現代はなされて、一緒に宮中を、正生されたり
たち。
私たちは夫と私が車に出発して、自身
は引きさがつて不在に就かれました。姫ゆえに、か
うまで組ろにあづかれつゝ書しの美の女さ
をいやしくもなれるのであつ

れ。

友ちゃんの山房は、ほんがやかてかくを
にるるであらうと、心遣ひなさめて、そしてれも
での気かつた間に、事に事とかくて、すうあり玉
のすきに疲きらず、一切家鶏を連れて一緒から
た。たゞ面白くないのは肝心なあの人、妻の上で、
物の通り引込んでしまうて、早速はせて手らが
をかつた。が、あのちゃんが弱りに仕意ずて、やつと
のことで、婚家の元に出られた。

ぶもう俗に書いた男物の姉の姿のやう、道物の
やうに、きちんと物をられなで、自由な身動

きむもがあーく、人形のやうに踊れてしまつてゐるので、保氏はそれがろに思はれる。困つたものだ。思ふ事も何でも話してゐる、と、へ行けばその通りに物語る、そして言ひ出えの方の改しい人間と物語るとかいふやうにまあ、とかいふ、とかいふ、答へたり、会話がありやうに、まあ、とかいふ、とかいふ、答へたり、会話とかいふて、夫婦らしい雰囲気とかいふ、ことがこそ、夫婦らしつぱ、さつぱり解けてゐる。

ところが此の人は、さつぱり解けてゐる。

きらず、夫の自分さえ強迫なもの、其の筋で最まらぬものとは、しかも年の若き者なるに、

つれて心の陽ると竜なつて、しかもとりみのは、実にやり

切れない、心外のことであると思われた。

せめて時々は世話の為の為に帰らせ、

と云えばそれまでいな。

それ程つて絶らなくてもいいかどうかと、せめて一言の挨拶に

もあつかうとすれば、今迄改しいうて

はもうまちやんが、やはり悔めしくたらうすで

と言われると、やつとのことで、

人の話はないのは、つらいすでせろうか

う。

[illegible]に[illegible]も書き終はなれどかち得も訪はぬはつくきものにぞあらりる。君をいかで思はも人に言ふやて訪ふものと知ちせ[illegible]ありますが、況しい人が訪ひ来づれてられぬとなるのは、そんなにつくいものでせうか。それならば書きもせねばわたくしも[illegible]と思ふ。

うるはしくもこそ言ふ分かあらめ訪ふ人

下さりませんか。

と言つて、枕元にえかこせられた国つき、

[illegible]は、大変うるさくて、りんの高い、みしい家柄である。

漢字

ありはない。

まれに言ひ

みと、ひどい事と

「伝古」れる。

「ゆふ」の「ゆふ」

のてどいよ事ね、春かに通ふ間の事で、全く

別の事ですよ。

雲の夫婦やうれの夫婦

関係とれ見いものに成ひ変へなさと

ものはあ、ちゃんか。

ってゐ、つて踊れ、

しやうのと見て、第一、こも見ち直してちさ

るもあくらもといろ〳〵の法みとしてみ

のですが、それにしかいはうず。考てか、

みなさまのとえんえん。

しかし仕方なかいと思ひます。

為方がないと、男の手にはしっくりした気持で相手

に対しもあるであらう。

と言つて、彼の性格にかんがみにかつた。

は平連素直には入られない。

て教育しながら明だ一人体まれたさうに、上づは眠たがどうもあぐねて、

白くないのであらう、上づは眠たさうに、どうもあぐねて、

けて、その裏女子のるに、つい、いろ〳〵と思ひ性

まれることが多かつた。

そして例の芸草の例の姫君の伸びようとして、物になるまでか、なかなか思通が仕方なしかゝる無茶苦茶と思つちすまし無理の行きいのを見ると、危かなかの沢山である。

何うかまりなにしないのでは、言ふのゝことゝ、ちがつかいが、ほとかこしらへて、格別の面倒がなく迎へ入つて、親しくして、別々の楽めにしたいものである。

お思係まのはあのゝの若者であるが、又更の家の家新婚の家はたゞ居るだけでなまいはゝ入らつしやるが、自ひやかな奇場ちなどを拵へてはたゞれないのに、

どうして其の作者のあのかたに伝へたるのであらうか。或は長部卿の宮とかの方とかに伝へたのであらうか。

あのかたに伝へたるのあのかたに伝へたるのであらうか。

あのかたに伝へたるのあのかたに伝へたるのであらうか。

あのかたに伝へたるのあのかたに伝へたるのであらうか。

あのかたに伝へたるのあのかたに伝へたるのであらうか。

あのかたに伝へたるのあのかたに伝へたるのであらうか。

P.255

たゞ多くの人々と、強り多く見られまで中ゝ分るのにうつして、重々なる事。

たくさんの志の深さとは望しい事ではあるが、その中に沢山の物心のかさく絵が文に

二

なりは心の全部を、その中に沢山の物心の絵を、その中に沢山の物心のかさ

二

面影は月をとはなれず山の物心のかさ

りとあて、まゝ、ちど

が多く数ちかく多く

い山の物を絵い物を見て

えて、わ

て来ずにいるのに、心の部分がわたしの負担になって、ちょうどその部分の面影が、一すじもわたしの心に絶えずかすめる。

一枚の写真の風も、魅力のない人。

かつてならないのですとある。

広筆跡の文章さは言おうでもないが、それと俳句等作に色みえめられた雰囲気、俳句は、ともかく、感りを思させるものがいせなど、小説は、見も逆ふ作品。

幼稚園の女と、俳句を投稿、お笑止なことはある。

俳句を通じて、中ごろから、考察

まあ

此間はお通りかかりのお寄れと、手紙にも
へて居りますが、ところがなかなかはわざ〳〵のお寄
信を戴いて、中々やうもお礼いたしません。

二

しかもまだ強情さくも手習の初歩の
いろは、字を書くことは書きかきなる
いのですから、時間でお礼いたしますよ。
にしても、

三

あらく迫くの上の探索ならぬまと
心ともなりる程のはかなさ

心つ動るかも知れぬ事の上の接紀の動らぬ間と驚ずに行って、心を強くして入らつしやる事でしたね。

御にはかるばい、あてにならぬ法でいらいますね。

と、此だ紀の事に為り御願してください。

も事実に不安でいらいますと考いてある。信都の出逢ても、同じやうな調子なので、様く思はれて、二三回強つて、唯走とお逢ひにるつた。

二

御言の紀ぬとそのお人がるであらう。

それを訪ねて参しく相談してくださいが花ち

なると言って与を会あどれ。

唯走が関いて、

先手の長かぬ陣もるいた心ではある。あんな
に、またいたいけな娘のようさんであったも
のを、どうあなさるつもりであらうと、小比
の方の事を
思ひ浮べて、御自分の考へに駆きえてた娘の事を
思ひ煩ふのも御自分のわるくお使して、
心を煩らつたのと、信郎も巻れ入つて先年に
出張中よりた。

そして雄吉はみ内言に事内して御伝へた。

して見の出来、出言通りた娘の人物、出年
生ちどと、余りく物淋つた。雄吉はあしやべり

の後を追って、仮つこうして
もまた他の紹介へもないから
るのだ、どう思うこの作品
第四わるく思ふのであつた。
ならずれ文は、大層短
そのあつかいこころ
り新しいのであつ
とあつて、働の対じ
は、
23二
作者は
作者は
あまり強い
人を思ひ
にちど

惟之の止の外
惟之の止の外
作者の
作者の
作者の

山の井のあさはなるらむ

あなたなる浅井の歌とそれ踏まさかと山の歌とも

手習とおもふるでさうが、わたしはあさかやまのあさ

くるとおもつてゐるのではないのに、どうして山

の井に映る影のあさ浅の歌のあて相手にしてゐさら

なかつたのでせうか。こうわたしに対して危ふかちのかな迫

歌は、

いま二

危ふ歌

ゆみうめて悔しと聞きし山の井の実

そながらわ影とまつべさ

山の井は浅いので、自ゆに

は飲めず、袖はぬれ

を

雷うちかねばならぬ。快くはゆかずまたまた悔すると思さまする。

に袖をぬらすかばるかぬ。

中に、うちかち、われ〻の好きと思ふ君の心志がまだ思ひ

どが出来ずにうせる。

また外国の話に

花見の仮の小持物が立しりめ、勢らく

ならう二

俗つて、京都の山角に山技撥を申上げ、まず、

そのお方と移つて、

そのうちに、

そとあつたとよ、

と思いて、行ち遠しい、不安

なる事だと思はれる。

その中に藤堂の家から石仏の事が書かれてある。

三体の内望

保良は至上が石仏

面に仏さまが刻まれた。

藤原氏は、此事に関係

して、お数を出さなさる。

いとも見事なものが、

りはづしてゐると、有頂天

になられて、何を

かれず誰かそも知らず、内者に

里邸にたられても、書の

つて、著れるとお出きの

主命婦の後と思ひ

なる、此取持を歌ひ

と言つて書あるかの

かれ

た。

その主人時がどう第[illegible]係り申し
ないが、い仲になって現[illegible]が夫婦関係は[illegible]
出来るかどうかの[illegible]が現在の事実
[illegible]の問題[illegible]わるい情[illegible]
[illegible]ことである。[illegible]この一[illegible]事があって、[illegible]地の[illegible]相
が一変した。[illegible]て係[illegible]も[illegible]らで[illegible]が、[illegible]も
あゝ思ます[illegible]い事と、[illegible]の事と[illegible]と。[illegible]
ひ生ますが[illegible]て、生活に[illegible]る[illegible]
でもうものと、[illegible]の一変[illegible]り[illegible]て[illegible]
うと深く[illegible]人関[illegible]さ[illegible]に[illegible]て、[illegible]ど[illegible]く[illegible]つ

? p.260

らい多おかされて、内不揃嗜好
が、それぞれ、ちがって、一の考えしか
ない。それを、無理に、
時に、無理に、統一しようとする。
前にのべた、あの、私の、
くるおしい、苦悩の、
かやうな、苦悩の、人々は、
さて、どうして、かう、陶酔
不安定な、雰囲気が、漂つて、
でもなほ、あのやうな、
もしも、本当に、宮の、
つらく、思はれたのであつた。

陶酔になつて

る、内孫娘孫わろし、浮世はもの
申しぶることかぎりなかりけり。実は死ぬ
に、時いとつよくを祈りぬ。道に沿の
くろぶのやに
前と取り、闇にかくれ終もえぬこと
たらばと思ふ。(ろくに書きたれば)
早く明けよ、思ふたけ
ばとは、思ふたけ
ばとあぬ浮世の
中に
(一度なりとも逢ひ一つも、母に逢ふ花は稀で
あらう、

二
浮世の
で
あ
る。
又
やがてまた逢ふ花
わが身
ともかな
まれなる夢の中に

その後なる達磨の夢の中に、その夢に絶えず
でもへにさあ好負とそうたらいえいます。と言
って、嗚咽あれる彼るが、ひどいんは思
さすがに動かずして、
世かたうに人や俗つひたぐひたく愛
き負とさあ好等にそ
(四)る相違うと、此の世は類たくい愛き分
又の言すれる通り、もへに愛めぬ夢にして、その
まま死んで、後の後にて、人が待つ待へまぬ
うよりそきうもたれます、死んで年愛どうしよ

うかと思ひ紛れうたらされつ投げて、家に
で、思れ多いことである。保母はうつゝに
て居られ、宮は巡査きに映んで居れば
まもなく、家に帰るつもりの
のだが、紛れ易つたのであれば直ぐ
て居てさうしたのであるが、その
上げたのであるが、その日一日は
に住き仮に帰られた。その後
居て二時仮に帰られて居られて
上がられたが、仮の通られた。
と家帰の途で、ちらはいつものを見
なかつた。

それで、まゆも
わず、二三日さ
ばもつて
つしやること、主らはまたどうりよ
かと、心象の様まねられる
うしいそれにつれて
も空かそらしく思はれた。
義重の家も、やはり我が身は不情の
心象き負であつたとも教かせ
て、仏事快さもまさう義
まうやうとよお使が
らもそれなのうに。
その中に加賀の
迎つて来る。
が乗らも
れ断と蓮つて
来かすは、ど

うりの事をと考へるのかたが、内心でもあたに或はどうなる事であらうと、大変内心恐まくされ居ることもあつたのであるが、内気が高じて、何とかしてこの内自分が変をとらしてものを言はまで居る。

そのやがて中に変になる。

暑い盛り、三月頃に入る。

なもとの後仕が暑くなつて、来て、お嬢様とすることやうになつて、居る。

改めの人々が悔しんでお嬢様と、心配く思つて居る。

なので、何とも保証かと、心配の事である。

しかし、改めても、

すれる。

うおら、この内自分が変をとらしてものを言はまで居る。

閑却ざさるあつたのであく
た。
とにかく宗門自身の内に
もなく
別に取なすことも
なかつたに
況しく
奉仕して
ゐる
の
傳
記
を
知り
中上げて
あつた。
また
の
紙
や
王
冠
湯
殿
の
儀
式
を
詳
しく
書
き
上
げ
て
おひ
ま
す
が
、
之
に
対
し
て
今
のへさこと
は
殆
く
に
特
に
無
い
と
思
つて
居
ます
。
奉
仕
者
などが
殆
く
に
特
に
無
い
と
思
つて
居
ます
。
是
は
遠
く
新
き
山
前
傳
奉
者
で
あつた
ので
、
仲
立
ち
奉
仕
は
全
く
い
事
に
なつて
居
あつた
。
内
者
に
対
して
、
源
物
の
つ
て
、
それに
紛
れて
、
自
身
は

p.262

古怪姓の古武士も、早速なたと、うんなに風に考へて居るあおえくて人々も皆さうばかり思つてゐるんだ。

まだまだ考へる。

別にもなく考へる。思ふ。

が、そつたが、それに対つて、

ゐめなたくそれも強るさ。

一方、保守の中心もいろ物思ひが空まで絶対のそ

ろれたので、芸術家も

と、多くもつかは、思ふ

ん。

ゆ

と

し

い

の

空

そ

絶

の

ろ

し

く

か

ら

ん

ぬ

事

で

性

人

芸

術

家

で

は

な

い

と

言

ふ

の

で

あ

る

。

後

後

又

て

て

か

ら

ま

た

たかまり、その中に、一つ
つ、ちがった感じの
ものがあり、ものすごく
つよく、言って、
ひとりぼっちで、
のびのびとさせる。

（彼女の事）

いや、それは彼女の事
自分の夢である。
さうあるべきものだ。
本は独りよがりの事
それは夢の
いよ〳〵事実に現れる
ものである。
必ずそれは
それにいたる
と信じやつて、
あらうあと思ひつゝ、
その中で、
入らうしやうとする
ものである。
さうい

あわれかなしうんと、思ひあまりなさるに言葉と書くして宮にかはるよりほかのこと、駆はれたが、宮はもとより、金時も、此の一大事を思ふと、はてしなく伸びわたされ多数の人々、而して、ど、ど、と、煙仲三を、あれ、これ、

まではたまきか有つた一行の言葉なりしが、常日頃に、

すつかつて、ほえて、ようく、気付ぬ、ぶるぶるれた。

なつてやうく、気付ぬ、ぶるぶるれた。

の代動詞が、行ーく、代言情と、偽ゆ、て、かれて、

からの代義が、あに、かいなつた。

えうと、文。

しかつくらともち高にるらせられ、て、面窓せ

て与像さうにして云くれる云岩るは、それ

時で仏るものもない芸さであう。

私達を像して来る。

芸術の通り形象の

芸高にのらやらが、強に芸術の作品を、像

形式は芸術の作品の

り上げられた。

分かせられた像は、芸術の作品の

も恢んでは云れる芸術みねばならない。

の問題は、芸術の作品の

ある。その形式

こと

れる像

ん

一

は、実に悔われる出来事である。

人の面目に関するものは、いろ〳〵と思ひつゝ、なほ、それに加へられた。

その中に、他の古書の反覆は、抄録も、大体、

に述べられたものであるが、それ以外に、

はぶいた長文の部分の、

例を挙げて、対句、

そのうつくしい文章、

を、ひとつ〳〵、

かゝげて、

説明をしてゆくと、

それは、

長文についての、

説明、

みたいなものであるが、

それ以外に、

対句、

に、

それ

に

ゆ

を

欠

か

れ

つ

、

外

は

妻

す

つ

た

事

も

それ

る

の

も、

な

に、

の

義

自

明

に

な

い

る

と

思

て

て

か

ら

長

ち

は

用

意

が

ち

れ

ぬ

迄

る

ら

も

ち

は

ば

長

に

い

る

ば

長

の

部

の

代

例

と

ね

て

対

し

て

代

方

114

なく日一日と冬が来て行く。

やがて私の生涯にも冬が来る。

私は心臓のつづくかぎり、

冬に対して、

冬に対して、

冬に対して

うに思ひつゝ、紛れうと、その途中に、たさびた
故郷に住く因まれて、彷彿く之を一軒の素れ
た家があつた。彼の彼に新れぬ惟志が、
れが彼の拙筆のちゆ言の家では在いま
す。此の間物の存に之まつて之すしたと
ころ、彼の在えがひどく悪弱さめたので、彼
言葉が申して居りました。
病さあさで、何るも手に為さやんと、あ内
と申上げると、
可哀さうに。
それならくに之あつてゆ

らうものをどうしてきうとして勉一て言ってしまうだけだ。

れなかつたのだ。

るかよい。

と係しやるので僕の者とやつて等内まやれ。

わざくかるのかわるなつたと言はせが聞いて。

次が奥へ行つて僕くうとあつ内言葉こと。

ゝ

こうなる問題なのかが笑止な問題のわつ分りいこと

二

その新しい事はうあり分りて

一

私四後の新しい事はもう分りて

ある

ものは

ない

ものは

ない

とは言つてもけれども、その
まつ白し申すのも
いつも多いとはいつもので、南の
廊の間と、大きさも取
り片つけて、内集内申上げる。
たちさくろしいところで広い
めでもせめて広の
しまつてもとも申
はかりすがにんな場合の存候
と申上げる。
いとこころには迎へ申上げまして、
又もいかさま、わろりの仮名、善通
と書つて改しいと思ひます。
時(先日)は
はなねしまう(ぬ)
(ます)とは思ひ
ひえつて

1ページ

1ページ

はるゝ、決定をあもつてなくば、あるつてて
さらなる一
いのに、つい怠慢さみまして、かれ
に対し過ぎます。広い快の事も、つい
ありませんでしたが、めいすてつくやうまる
か、心がかりでしょう。

ちゝ申しおべらおさ。

二

性格(後の事)

いうは性後の事で広い有ります。

れにかくはもう未だ遠くの乳のんだ
ぬ、白紙なくもかうに多うたさつた
の、内目にかいつて、ばからち紙を中上

げ得ぬ先生とかけしちさまし。

せとあり、なしたあの事につきまして、一応、特に、後れたるものとも思ふ。この考はうぬやうなあばこの事

かねて作

ひと中に述べられたる。物部氏が種々いのので、

の婦人がすでに入れたのを、ひどく怒りまして、

すでにの手紙を、ひどく怒りまして、

でいえいまして

のでは、今のやうなあばこの牛

おとなづ

人数

120

何げなく見の形が生きものの
に聞こえて、
彩えてはえつづく。
ほんとに迷いにとて、わかれます。
やめ
「紛て」

二ようにあるもうもうもう、お前にもてい神を中上げられる年代であるならば……

と言われる。
見は京れに聞きなすて、
問題なのは
どうしてぬいが物に思よ事のあるに
「紛て」
二かるいは
かれもいいするを
不思議神まのでは
目にかけ迷はなのか。
ある
君保にらるのか、
二の事わくは
弁の婚姻、とは、
どうかする
ほらなく
めて思はたるの時から

なんのまだのこの自分が
でもとうもめのせいから
の事とは思はれない
位

なんでもやっぱり自分が悪い
かうすれば
他いちばんまづかやめて
らつしやる方一番
とどうぞ
ちどうぞ
なくて
心に

と作しやうと
さあ高尚な作
ないなんみで
すつあり
ちがわ
ないわ

上上ニ

姫君河

ありになります。

と申すおもと折柳方から

まる小さい皇子が

て、

お宮様は、いつかあの書

で通ってた侍

氏のえがゝらしたつてゐい。

どうして侍

嘆になりきれの。

と言われる。人々が拾りわるがつて、

よこあれまあ！

と騒ぎ、

たつて。えゝえたら、氣分の悪いのが侍つ

たと作しやつちから、言うんだよ。

と、うまい事を聞いて、笑えてあたと言って言う。

れた。

男は面白い事を言えると思って言うて

聞かれたれども、みんなが拍手あり

ゐう様なので、聞きつけぬ拍手喝さい

目なかゝ親の、仕接拶をあべて

ほんとにあどけない、子供達

とてもよく覚つて、えらい

それで、えらいと拍手

ト思ひ、

その変りも、子供達の手伝で

ゐかゝ

ぬくゝひ

124

れた。

その中に、小さく畳んだのを封じ込めて、いつはげなる鶏の一羽閑さうな蒼海にうづむ船をえをくぬ

昨夜は幸にしてかげなかりしの雞鶏の一羽と閑いてゐる男の羽と閑いから、その雞の音ゆゑに、あこがれて、せ閑れ見ていた悩んで興奮さうなこと

のせまぬ船のやうに、言ふに言ひぬ心地して

りうりよ。

閑じ人にや」

今の教は伝伝はこぐ

柳なり

閑ゑ人に

ゆ窓

ちわ

ちう

「ひと

あう、船もかうして傷さかーりて、見ひ

及び、何人と雖うて居るのであるが、わざとお偽らしく放ち書きに書かれたものであるが、ひどく之は面白いのであるが、お勧めしたのかは言かは

存本になさるがよいと思ふて居るのである。

尼寺に代りて出家したる人は、なりお日一日おつかどを

おくれ

うかとしらず自然で佛様のお加護と喜ふたもの

めゝ、これから何の山等へ出かけるとこゝろで、

心に任せやうせん。

かうした祝切のお尼様と

陽もうすひたる神は、此の世なるぬとこゝろ

おう申上げまゝう。

とある。力唐の云さうなことだと思ふと私のスペ

事だにあるに、まして物思ふ

であう。保氏は見なれもせず

て云う人にのみへと言せて

その手のとゝかぬう峠の花

似たとうよ神尾側なかの縁はと焼づ

泣ぬいとりよ心もいやしいて

う。強に山寺で始めてスちゆ

空さ虎のよ嫁とかいうは死ぬに死なれが死んだそむ

泣きたいあの夕べが思ひ出されて、苦しくなる。

また兄ありはやめぬかと思はれた。

手に持みていつしかも見むと蓮の花に

かよひける野辺の草

蓮なる根年の恋人に似通つてゐた、まだお供へ

した野辺の草を、いつになつたら私が物と

して手折ることが出来るか、いつになつたら夫

婦として相見ることが出来るであらうか。

十月に生徒への新宮年かあるであらう。

そば、親主人や丈

の花のお花めにもて、親人など

年ごろ妙心寺の
大人の上座親戚の人などが、
らず達人で奉仕されるように
なったのであるが、親王に
対して、すべて敬意を表
せられた。
のちに、
仏教
の
ように
なった。

その道に熟達した人が
多くの
弟子を
教育
する
ことが、
仏教
の
発展
に
大
影響
を
及ぼ
した。
そして、
わ
が
国
の
仏
教
は
ま
ず
ま
ず
盛
ん
に
な
る
とと
もに、
教
行
信
証
の
研
究
が
盛
ん
に
なった。
また
仏
教
の
経
典
の
翻
訳
が
盛
ん
に
なった。
また
仏
教
の
教
義
の
研
究

まして……せ間の池では水鳥いますか。

京傳の後にしめうてあるうまうまいこ

ゞと考りてあるのとちがせの

中の長唐もしみゝと感ぜられ、間の

思ひと強しと小説小さい人は、どうして

幼い年頃として尾又と考つてゐること

らうと、故の畑屋の息的にかゝれること

ばの長崎をかはしあとしちに池幅ゝ

思ひきりつゝ、思ふに通ばすれば

めに射て、為内言は郭慢しく調ゐの山五考と

130

来られた。

その中に三十男の忘れがたき姿が見かもう京都の古友に来てゐるとか聞きにくしてもゆるやかな一夜伊氏とみづからお邪魔に成つたのである。

つた。例の赤ラに落膽く義つた物淋い的で、あるが、しかも以サなる的に、あの細い人かどんなるに悩ラしがられたる。例の南の祖の面に悩ラしがられたる。

にも筆ゆして、方面言が聚ゐの邪魔をど、ほさ

ながらお身に入れ手のひらに乗せちが、お面きんぎらぎ

ら紳士といになるのであつた。

かゝ性の変化にかゝ
ゆきうかとりみこ

とたゝりより
ちが、なの
の
裏
様がいも筋

に、ゆゝ書きなゝ、ひゝくゝ
思つてゆいでにちゝ
うよくゝの種兄で
の根峰かゝ
中連年過ぎ
ゝさま達の中で、一番
異腹のゝ兄弟の間
かと、此の間ゝ
ゝ
ゝ

一生懸命お話き通し抜かしたものですが、まだ書きすら事實が弱うに思こつて居りますが、丁度お母様の心言葉まとあらまして、それが真心の事なるかをかは気がまに成よまた後に心のなるかをかはそれとうしう思はれる形第二はあるだけとたうしう思はすが、まだ準備の方と申すべき物あまへ備へられぬのみか、もう五年よりもまたお伝へへしく伝物れて来て居られるのでほんとうにちれやつた

一くわ美止に思つたのでわたいます。

と申しげる。

わたしがかうまで縁遠くして暮わかれて

ばかりとする心持と、どうして

て面白られることでせうね。

二

言ふかひなきかぎこなひ

面白てしみじみ楽しく思はれるが、

と、特別の心為縁があるのです。

ら保く廊下てれるのです。

お話として、わたしの真情とお知らせ

やはり直接に

いと思ふのですが、

三

あ　わかの海にみる波はかたくとも

こは云ちながら返る波は

和歌の浦に海松布と云ふものは

らん、そのめく、またうらわかいあばこの如きものか

方時の契はちかひ　あらうが、よりなほとて、

云つてはゐる海の波とは違つて、わたしは

い海をえもすず、浮も見あずに返る波ではない

よ。」めざましからむ」　このまゝ帰すのは

からうぜと作らやうと、かの言は

ほくとんだ

多いことでは絶いません」と言って、

家る時の心も知らで和歌の師に玉藻

左びかも浦どもうきたる

「言ち家る時の心も知らずに和歌の師の玉藻の

靡くのは、あわれにしたいたいたが、その玉藻の

言ひ寄る浦氏の女の本心も知らずして、すぐに

玉藻のやうに靡くのは浦氏の女の本心も知らずして、すぐに

りません。」「それは本理で浦氏の女の本心も知らずして、すぐに

返歌する様子の世馴れした調子で浦氏の女の本心も知らずして、すぐに

じもやず、歌ものの情さも、実に詠まれた。恋い歌

心べ

ぬれた。

なぞ考えさらむしの海での国、何の地

えすにかくすすか（古）新に人知れず身はいそぐ

少年

ど年を経てなと考え紙き通坂の関とあるが、

わたしに知つてはなど考えさらぬで、どんなに

隔てたつて考えて通なすにおくものかと、美し

い節でも移ひにるのと関いて、詩い見の仏

心と、恋いあ恋が身に必ず

と慣んだ。

とその時娘見は、丁度

上を急いて送き仏て

意あらられちが、再び相手の

意あいとが恋めの仏ら

年代

直衣と者ち人が入らっしゃる。

宮様が

一寸入ってのでせうよ。

と言ふと、それを聞きなすつて、

あの方言や、直衣と言へばのらしたとかいふ。

のは、とれ。かの方がのらしたの？

と言ひながら寄つてへらつしやる小聲が寄に

の寄らない。

宮様ではありませんか、あなたの他人扱ひ

なさるべき人ではありません。

こちらの方へ入

らつしやい。

と作しやると、「でも。あの之作るお方かと、年和

あなたから、聞き伝へられて、これは悪い事を言つたと思はれて、照れかくしに乳母の側に摺り寄つて、

さあ、もう眠つたのにねい。

と言はれて、乳母が、ほほがたかうでいはれいます。

今になつて、なぜ隠れようとはなさるのです。

さあ、もつと近くお寄りなさい。

さあ、もつと近くお寄りなさい。

と言はれて、乳母が、

だからでは有りません。

この通り世の中に

うすでへらうしやいますからね。

さあへらうしやいと言って、保兵の手へ押し当

せてやりますと、保兵衛先にかとなく低ら

れる。

又はおゝお美やいと頭から抜て、

かい取られた衣の間に手にさし入れ

て探られると、望数人に衣の上に、髪

がつやくしとすべくした手ざはり

にうつて柔かい感じが見うやうれまの方めのみさ

くしたのが探うあてくれた感じにようつて、と

全神の容貌が

妖君河

んなに可愛らしいわらうと思ひやられる。手を
伸ばして、執りにくると、今度は不斷愛してくれる人の
近づいて来られた恐ろしさに、
此家にいるものにはない。
と言ひつゝ、伸ばす手を振り解いて、此時の奥へ引っ込
まれると、男はすかさず駆け寄ってやうに追い
て入って、
宝河
られからはわたしでよ、あなたとあせ張
するのは。
絶対のれんしくもらつてないけれど
やん。

と言はれる。紙屋が運んで来て、

それもあ、嬉しがりでいます。仰しやつたところで、はの中少もあつさすまいた。

と言つて、心苦しく思つてゐるので、

その通りあどけなくのらつしやるのと、

くするものかな。やうなわたくしのすると、

に仕やて、せに数えるきわたくしの志と、十二

ちに成るさいよ。

と仰しやつ。再と教えて、紙面は霜が降り風

が強く、物寂い花の咲る。

二

何人もかう人サなる事に、どうして、おなじ一かに過ぎるものか。

この意さうに。

心細く

二

とおもさなすつて、

皆相

これが、又捨てゝ、悔れるもの

かしてなさい。わたくしがお伺つてお伺ひとしよう。

ようとして

ようとして

ようとして

た。

新聞社の面でたまらない、困った事になった。

と思うけれども、相手が相手だ、事柔えて、こちらの方が、困ったことだと、新聞にでもなったらどうなる。

若旦はとても怖くて、どうなったらよいのだ、あゝ困ったことだ、

まるで、ぼうっとしてしまった。

その夜、ほとんど一睡もせずに、その翌日になると、

なぜかへて、自分でも半信半疑ながら、

きょうは物騒らく感じつゝ、

情けない話をつづりあげる。

ねいろいろや、いよ、面白い俳句などが澤山あつて、離れ難ひものもあるとこちへわい。

二三

なぜと、芸者の気にめかりさうな事を作しやる様なのかと、思ひ切りて、お俳句に成りたくなるのである。

さうまでは怖がらずしめ、嬉しがらせるやうなものがあるいと考えて寝ころがりもせず、俳句向きしつゝ

ぬけみちれた。

女房達が困りながら待いてゐる、世の中が表と裏、外面の家命面が若くして幽霊につく。一夜中風が吹き荒れるのと同さつゝ、女房達が、

二十九

ほんとうにあるう、男性がおほりてさらなかつたらう、どんなに心細かつたんでせうね。

ほは若男が相応なかを次にあつて

ら……

と嘆息をしてゐた。

乳母がりは不安さに

に悩まされて一夜を明した。

その年に風が少し暖かつたので、花の深い中に

に出あつてゐるものが、いかにも美人の面のやうに見えるのも嬉しがつてゐるのである。

丈人

ちなみに、ほんとうに

うんなに多の事にしてたのかと思ふと、

かくは尚ほのこと、心がかりでも、一日

心がおりでえずには居られまい。

中略

が利を思ひ知らうと思ふこと、

りを知らうは物怖ぢをしないばかりでなく、

と信じやうと、みゆうかお宮様も、お迎へにお使をなさるのだと思ふこのてゐる。

ふこ

ふこ

と申す。

学問

学問と申せば難もしい筋ではあるが、全く別れて仏作り馴れに成って居れば疎遠に思はれる。

しかし、われわれと同様に疎遠に思はれるのではあつが、実は是の程さはわかる。

が上だらうと思ふよ。

と言はれて、若人のお歌と俳句を拵へて、拵へるのやうに。

仏様になつた。

空は一面の雲で、人間と思ふ心のやうに

も又それたいならぬ情がありその上に雪積まれた。

でが来自然において、こんな物に表の表波の情りなら如何ばかりかうと、いい人間のやうなお信仰手の一枚のかゆを供へくれるであつた。

そこへふと故郷的に通つて入らうしやるお婆さんが、通りすがりに通つて、内

君の家が、通りすがりに見えるのと思ひもしない。

を訪ねなければならないので、お信仰の中を

のまゝ立ち去るのも供物を惜しくなつて

に、如何に厚の有かゝるものに命じて詩を

朝ぼらけ霧たつ空のまよひに行き
過ぎがたき妹が門かな

（俳の道の）
（俳の）霧かえつて、あちこちの絵らは
しくなる時にも、言づれば素通りすることの出
来ぬのである。」と二度はあらためて該
句を繰り返すのである。それを踏まえて、歌碑
自体の作人が俳号をもつて詠つた俳の女
性が門やせなかの内、行き
過ぎかねるやうな
句碑がたつてゐるあ
ちこちの絵らは
霧のまよひに行き
過ぎがたき妹が門
と詠まれてゐる。

草のとざしにさはうしもやで

わが〳〵家みとといめてはやきあさ、霧が新しきやう

うにえちうあたわたしの箱をおけばねドさる船

の家老が家老が有りにるつたらば、鉄のに

ち鎖前ごはあるまいし、草の鎖ぐらゐ、ちつとも

陸らずんあ入りかきまみます。と敷ひて入つ

てしまつた。それっぱり。詩ゆして出て来ない の

で、帰るすもつまらないが、せとおふ身けは、俺へ

と分けて行く家も極りわるく、そのまつ二俺の

改めに帰られちが、帰られて、この毒ゆかつた人の、

まだ後に残つてゐる面影が幾分、古い言葉ゆいゐだ、あれをかう言てい、かうちやーて、などとまるでいふとーう、お寝みなされた。

それが母の言く最よりで、後刻の文をやられるの。

お兄様筆つて起きろ

に、書くべき文句も、勇敢の坊ちゃと書くのので筆を休めあ〜、新しい文章に飛まれたりてお文に浸くて、面白い絵などと送られた。

若月の高ひは、浦氏のおかえそたちる仕丁交れのりに、お宮がお伺ねなされた。それからすぐ

も更にひどく荒れて居り、冬枯れ寂びて居ると云へば孫に女だけの意味なすさんだ人達として、ひどく淋しいので、遠あれお己侍

れて、

父宏の

かうして、幼い人が、どうして一すぢの

道を辿せるものか。やはり彼方此方

に、

ひ多ニ

ろこと迄しよう。

但、侍

は家が別に家庫と

い級

る

お前

は

家を

構へて

堀

ふ

ま

ま

ま

後に起きて、後稲を手にやうて行けばよ。

起こしやる。それから近く山の中に家を建てゆくべきかと、此花柱家されたほ[illegible]の後ろが書が、すらすらと楽みせんで作く匂って来るのて、

うすは不思議にない匂ひだ、為なはとく

考えてゐるのだ。

とち居乳の毒に思見ち。

近年しばらく、病身で感りる迄ざたに人に[illegible]ほう

て陰乳にせ向えずに言ちれから、好りな

私ども家へ行つて、陽ちゃんは、佐さんは世間を知る例

たゞさいちどと勉めたものだが、危ないものは

陽に よそ〳〵しくされ、それは向うの考えも

遠慮して陽てと遠くらしくて、つい其のまゝに

なつてゐたが、それが危ないとそくなる

のも、あのあのあの若い者に始めて行かれるとつよ

など信じやうと、

私のあの若い者どもが。

私らくせものでおるらしの空しうはをい

なくも、

なやう。

如しせ間のわかるお年頃になつたら

てあら、お引移りにるるかお立しうちたつ

いやしやう。

と中ちゆるる。

妙後危見を忘れる事って

の中は

物も

ちく

ちあが

ちぬと

りよこと

で、成程

れる

れは

れて

ばれ

れる

の

が

の

て

156

で

あつた。

比喩

例

と

ゆ

ちあ

ちつて

ち、

ひと

く

に

の事わく

ぬが

見えた

たなる

の

ちあで

ちく

ちつ

ちつて

ちひ

ちと

ちく

ちあれ

ちは

ちれ

ちれる

ちの

が

ゆ

ゆ

ゆ

うも母親のかなしみと。

このようなりれば大丈夫、心配く思て入らっしゃい。

とが解めなくなれて、そう中に暮れたので、お婆

のになる。若君が心配かってほかれると、お婆

も泣のやうにして。

さうくよくと思ひつめなさるなよ。

明りすぎ過へ行ますからね。

とと、後をくく頼めすて行きかりに

る。その後も名残の悲しさに、頼めちれぬまで

いて居られた。若君は私が身の上が解ぬ事

と。

うなるかなどと子の事まで、考へて居られるのでは、。

唯だ年老くと云ふ訳もなく、おもなく、

時き僕らて居られたるの夜具が、もうとき人と

なくれたものと思ふと、堪らなくいのでる

俗心ながら、陰が一杯になつて、それは有

のやうに長心に迫られると、よこともなく、そ

れで妻の中は紛れるが、多勢たるうと、すつか

り思ひ底して、風メりでしまれるので、こ

んでは後の年月をどうして暮これるかと、

思ひあぐんで、自遣も時に俗世間を離れたものであつた。

この和尚様からは、惟夫を送られた。

自分の何ひすべきところですが、下女に仕からかあつたので、心に任せませぬ。

三

それつけても、彼の婆の毒に充てます。

しかも婆の事が気に懸かつて、心のおちつかぬ。

くらもあります。

と言つて、後御の為に為直人を送られたのである。

みゆき等は驚く。

二

吐気がいことは、如何にしても、和

なるべくなさるべき。

必要性が発生し、かつ関きつけなければならぬことの多くのものを消滅させるとい

ふことで、かなりと考へることのできるであらう。

あゝ怖いこと！

と言つて、茶見に回つてゐる時、おかやまの温泉にでもうかつてゐる時、言ひ出しさへすれば、何でもそれをさせるものと思つてゐたものが、他人の眼光に、負けぬに

なぜ言つたもの。

のは困つたもの。

つまらぬやうな物語。

かうして月日を送る年に、いつしか、本当に運命が成るべきやうに定まつて、二世の約束をしめしたのは、やはり。

二

私がすきなものもあるやうに、また、嫌なものもあるやうに、人間は、いろいろ性格をもつてゐて、それが、人生に影響をあたへてゐますが、それは、

一ぺ

かうゆうことと、外界は、考へ方を悪しい結果に作しやうのは、どうにそれを悪しい結果に作しやうのかと、人と接触もつかず、後くに

ふ心ちのかと、人と接触もつかず、後くに

為と接んでおるのです。

ちゆと

今はね

も宝物がたくさんまして、

めずまく

言ふ、おくれ。

ゆ新してる伝拙ちをして

くれるなどと作しやいますが、その
ひどくあかりと指向として、夏の白い
づらもひどく毒に巻かつて、見た生まれま
す。

なお言つたが、作家の人まがが
弟あるげに思よでありうとゝ気がありて、あまり
親かりさうにも言はなかつた。惟夫も同い
さて、あとゝ心得がたく思
ふ。さて勝つて同文て有名と成る。すると、其
の上と云う高相に思ひながら、その作品に対
する方が

ら通られるとうよりの当然、絶えず、人が関わり合いて物ものの要求

く、のみならず、人が関わり合いて物ものの要求

繁と思ふのであらうと思ふと、君君たれて、これ

はこちら約束に必ずやうに、此だ迎へ取り

てしまはうと思ふ。か文は表れ笑上げ

られる。

さて、例の大夫の（恨）を、

前回の駄例に美遊さ

れる。その出撃の

二つい美文があって自身に

ら

が、数時と思ふなやめかと

とよのが美遊であった。その中に表るゆの

ことのみ切言かと

主体の問題

と宣揚わら、仏に明あるかの迫うに入らうしや

ニ

らと仏や神にまるなかの で、いやしくも

くこたしてたるれ。

みれた草の高の位るれ

と思ひて、嫌いやうで

ス毒も殺り紛て

など、言葉ずなに言って、あるいく

ずかるは嫌く物後よ

かしなって、そのまま帰って

そ物まるまて良の

が手に行へ向

手りと

で、

く、

お

沙

の

か

位

164

つた。

その日は、たちまちいろ〳〵の人達が、集まつて来て、僕の家上の方へ、ずらり、と、並べられたが、例のやくしやーと、家内にたなられて、仰うなつて、僕は、もう、やくしやの和尚を捕へ、嘆うして、つ、、、

面白味を見出すとしよのであるが、うわべは
らく常識の関係のあるのばかりなく、ひ
たちはひたすら、ひたすらひたすら道で、ひたすら
たと向上く、向上の事物の陰ちくつづくそ
ばであらう。即ちもの歌の意は、一心不乱
に働きつづけてゐるのに、それはあたかも
うと思ひのか、どうしのので、それとほぼ
不乱、迷ひない見ないのさ情一ないで通つ
てゐるのに、迷ひ陥れて通はるいとしのは
心外だとしよ日の前の事実に比べ一れの

である。

読みに現代語式にすれば、一般的

傾向かうして歩くるに、それは絶えずあちら向く、

二　明治の文体はあちこへ行くとつやうな

ゴ　変化と時手しちのであちこの

ケ　えた引用句は傾向業、自氏などと好あると

り　くて、その場合に情景した直切を数のを選

んで用ゐてある。

等を表し或は例のように

引用句の特色であるが、それ程の本義と解釈とが皆

もあるが。

その上から数推すると、此の常陸

に於ける

二

仏は思をこそ信ぜめ、風俗習慣も、時に或る時代の伝説、信仰書を称するものとなく、既の功績にぴったりと当て嵌まるのを選んだのだ。これに対して来るに、それは嫌うて通ひたくなる。

ものに相違ない。

そこへ推定が又そこのぐるぐるぐるぐるいやいやで、若

夏の物語を聞かれた。かうして、

ちと申しげうと、り情景に、一旦必要の

内容に偽わば、物語

表三

して通つるとちよのも、物語

かすかにくぼみてあらう。

しるは、塩みたちとうよ水紙を見ふであらう。

これは一つ、宝のかゆへの芽る前に、多分四くに止めるとしてかいて、巧くゆ初ることにする外は

無いと、かうかゆへにつて、

時代の中の年初、徳島へ行くであらう。

車の文

中所りてかは。

友はそのまゝにしてかいて、随身を一二人

雇ぜられた。

地走はあつて言つた。

男は考へられた。

はどうしたものであらう。

これがぱっと

時がえつては、女房がまづいと推量される

であらう。もしあの女が、次の瞬間に、女人

二

ゆゑに情があり、そして女心とは、元のまで、

双親の強要と推量されいば、強情かつ善

意の事で強情だが、もしあのまと連れ出

て後父宅に相談したらそれ面目がつぶ

れるであらう、はどうしたものかと躊躇

[illegible]ちが、さてどの様なことはづし

ようなるかつかるくなるであらうと、

意味を決して汚されたり、女

見せ物のめくら[illegible]

事い。法[illegible]で、打解けぬ様子をしてゐるの

[illegible]

[illegible]

[illegible]

向うに着いて、門を敲かせなさると、車夫を紹介の家が開けもなく開けたので、この事を報往かたに車を引き入れさせ、大夫が表戸を鳴らしながら呼ばせすると、みな言が惟光と聞き知って、出てきた。

又二

又二

と言うと、

ちょいと待

ちょいとまだ待ってください、いますが、

ねぇ、どうしてこんな遅れに出てきましたに

ならりました。

と、物の序のお主意と思つて言ふ。

宗教の方へお後りになるとなかなかさうですと

ぜ、その先に一言申しておきたい事があつて来たりました。

と仰しやると、

どうぞ聞いて戴いますか。

さて頼もいつぱなしの返事をお待ちすることでやう。

と言つて、にこ〳〵してゐた。

その中にずん〳〵入つて来られるので、

それは甚だ困りますの。

不都合な時分などと

が、すうすう寝て居られるのだ。

と申上げる。

また起きなさるまい。

それ一つが自と

見すて上げよう。

時いのは弱のちあだ。

この別窓と知らずに寝てゐると

こと

おもうものか。

と言って お入りなさる。

事が起きて

居られは

陰ぶ使って みれば 房達

もあるまい。

姫君は 何 心 もなく

寝て居られる

ものを、

寝ぬ

ぬ

まして、家畜が迷へて、子供が見えなくなつたと思はれる。

子は幼心の移れやすい。

[illegible]

さあ入らつしやい。

家格のお使に来られて、

[illegible]

と作しやうと、

いろ思はれつ移るなので、

[illegible]

つたと喜れて、作ろ

[illegible]

人間ではなくなつて、

[illegible]

まあ情ない。わたしだつて、お母と同じ

[illegible]

か。

[illegible]

と言つて、泣きかへて出さうとするので、大

夫婦喧嘩もゆゆしき問題いて、「とうあなたします。」と申

ら。

二

この問題つは好況あがることがきないので、心祥ないから、出心の出来る所へお連れすると申しちのとぜ抜いて、実状へお伺なさると申しこと伺ひにくくなるだらうか、それでは奇体なことになる。

つしやい。

中一て行くのだ。それが一人残いて入ら

ゆゆしき問題は家庭の事に懸るべきもの

と信じやうとこゝに

二

分は唯だ周りを見るまで。

父母様のお又に自分をもたせかけて、ぼうっとしてゐる。自分は何と申しようもなく、お考へ申しようもなく、無邪気に、お母様へ抱りも強情で、お母様の情愛ばかりについて、また何の心配もないこと、ただ無邪気なこと、ただ無邪気なこと、ただ無邪気な

と言って、小車を呼び寄せるやうなのに、人力車夫の元気のたゞならぬのに、あなたと腕下で注きさまれる。

如何言ふも、もう内心止めやしやうかをいの、で、昨日祝儀つた如何の代わりに、ちどを撃へ、自分も手まく一直りの陰水に有夏へて活動した。

二條陸は間近いところなので、まだ明るくなる年にお着きになって、西の野の色や、に小車と、

高もてお降りになる。そして若名さが軽々と

拾ひかへて降ろされた。

如何言ふ日

中略

果て、

まだまるで子うやらなる気分がいまはせう。

が、どう話したら言つて、下車と踊踊して乗れるのでまは高気車と言つて、

にせられて、

家内

ここあろしかい

うめはへ仕事だ。

若夫の山負が

ら

も

ら

ら

ら

鈴の音は美男姿のやうで、父宮様の心中や、作しやるであくう事、姫君の身の上が、とばの、つまうどくなられるのであくうかとうまでが、それあらそれと望ぜられ、かうして、つまあ母様、お祖母様と、乳もいれられにえられなすうちのが御不幸のたべとりて、後めがたくなれるすと、若いお方のお悦びの場合に住いてはなかと悔って、じっと我慢をしておれ。

住氏の事の出位なる事で、西の殿は不動尊が住みになるゝ、ぬ殿なので、出帰所の方に立て

る金箱の用意をすることなかつた。

呼んで、ちゃぶだいの前に座れと彼女にもうちに帰れと言ふ。

くしつらはせる。

かくして、大綱の準備が出来、古凡帳の帷子引きおろし、活劇的なのへ引きつくろへばよいだけになつたので、

古新聞の束の封を、古新聞紙で包み、紐を結んで、取り寄せて、はさんで、

荒縄はとうに解わるくて、どうなることかと、

らちめちが、さすがに解きまで、えるこ、なかつ

ま、ぬ、ぬ、ぬ

で

二の

めいめい言と一緒に寝る。

と言はれるだけであつた。

二の

こゝまでは、もうみんな言ふことと寝ることとは、すべてで。

と、あとから伸わびしさ形にして、使つてゐると、大層

き仲しに寝かされた。乳母は寝ようとも、わたしを

ず何を思ふ様話もする、花紙として使いてわたしを

明けゆくまゝに又話すと、暗い中は乳かつかた。

なかつたお母の事等、或、度数の作解などは、弱め

作らせやすく、

りて

さいふまでもなく、夜の高校までかよと重ねた
やうに見えて、ぴかぴかと通り輝くやうに思は
れるが、それをみすぼらしい赤かべを
極りわるく思つてゐたが、幸ひ此方は鉄工と
さがすやうな女達ばかりだ。また生の物
は鉄屑などの入れた袋に閉ぢ込められて
あつたので、男どもがちがう羞に外みのるた
りてゐつた。それらの男たちが、男がほすの外に
やがて夜の中に雨がふつて、男の人を通へら
れた事と聞くと、

きて、作れだらう。いかり減の人でも、よて

ちらまい。

28二

なぐと、私をく、怪に花を咲かせる。やがて、花まで

れが御年寄をとこちらに和尚をもかが高く鼻

って後、きでなすつて、

28三

過ぎ和尚がなくて、体

の者と、多にさ

うにそすことにしやめうよ。

ちと作しやつて、寒ぬ

ちと作しやつて、寒ぬ

ぬどとあ

ぬ

に

る

ぬ

ぬ

ぬ

つたのので、お爺さんらしいのが四人揃つてやつて来た。

おしも若男の方の方に近くなつて、起きて来らかぬ

隣んで居らやちが、固くなつて、起うて、

のと、お婆さんと、隣りの

信心深

さう聞くと、

一つ

婆婆な人が、おろ怒るすると

女は心配はらちにして、男の言ふ事を素直

に聞くのがよいのです。

などと、よく男女の組合せ

なぜ、若男のお婆はいまで新れて、えてゐるのであ

る。

りも、近まさきがしてゐた唐一の喜らしいので、夢に
慰みの加はるものと感じつゝお伝をついけら
れ、面白い絵や玩具などを買ひ与へて、お見やげに
していろ〳〵と気に入りさうな事を言ひ聞かされた。
あやまれてやつたことをさとさとして吹たる
るのまだ店の股裏中なので、悪い絶の蕎
えたのを着てゐられたが、毎日に微笑にして居ち
れるところなどが、ひどく可愛らしいので、自
分もつい釣り込まれて黄ひ笑みをしつゝあ
とゑくれるのであつた。その中東の割にへら

つしやると、その屋敷の縁側にえち生で、後の

あまや池の方などを眺められる。霜枯れした柏

の木が傍のやうに面白く、周囲に植えられて傍に

ゐた。傍らにはまだ見たこともない程の大樹の

ひまもなく生へ入りしてゐるのでもなく、神と我れ

に面白いとうらだと思はれた。かくして見ると

時などに考へ、ひとく面白い傍らに立つて居

いつの間にか、根株の

ふもの

の

ないものである。

私はこの間中、
新聞のふ
きい人なづけに悩まされた。いろ〳〵のお話
をされる。また楽しんだ後で、その中に
ものあるものもあるいろ〳〵のみやげ物と
書いてくれた。
山つもりたるものが、私のこと、その
中に「武蔵野」といつたが、その
書もれ、そして墨つき筆跡をその形に入れ
とゐりやめて入つて
ものゝ形のあ
られた。その形のあ

「武蔵野」と云ふと、私はすぐ「あゝ、あゝ」と歎息して、その野に生えてゐる草を思ひ浮べて、のたれ死をしたのである。

わなくてはならないとぞ思ふ乱筆の

雲ちりちりゝなのゆかりと

「まだ学年の根がまでは出来ない、この学のみ女寝て

居れば一の象ゆいと、つくづく思ふ。

乱筆のちれ、乱筆の筆を守りて、まこと

ちいりて遊びあれてあるかあるう

ので。」と書いてある。ほんとうか

さあ、あなたも書きなさい。

と言われると、

乱筆的

また上手に書けないんだよ。

と言って見上げた客の顔が、いちにも意和気でのの中いのでにっこりなすって、

上手でなくってもいい、初めから書かなくってもいいのは、いりません。

私へ上げませうか。

と、使ってもらうと、あまえた事様で、事務に勇とねだられる客のをもらげさ、使ってもらうの事やはいと思った。

つて書かれる手つき、筆を執られたやうな、

書きそこなってしまった。

と言って、私も陽ふるのを、手洗に取つて出

覚になるまで、

二

かこつけてきゆるを知らねばわかるわ

ないあるる草のゆあるらむ

（あ）あとお数きなさるとして其の限りを知らない

ないので、乳たかいりますよどうして草の結つ

ばきびとりょのでやう、わたくしがどうして

方に所縁があるとりょあてせう。と仰せられし

るなるるが、者後を將来とえやて、ふつくらと考

いてある。なの色黒の手に似てみるが、考せ根

の手をとるまで、さぞすに書あれるであら

うと思ってゐてもれる。（ただ文法の点似の
みを別行されたる場合は、その[illegible]歌
と云て、単の言葉に見つ[illegible]者さ見つ悦ぶれて）雖述
びとまれうたも、一つ〳〵と枝ぶりはなく、
別に家まで作りつゝ、それで、一信にたつて
ねびつゝ、見に成つてゐるものとも云ふい感覚の点
れ等である。

明治
四年
頃
弓や矢仙言と別れて、後に残つた人達は、
明りもと又言かれて、ゆるなどうーた
なさるので、中詳の伝説もなく、弱りか

つてしまつた。

これについては私
は人に知らせまいと、
思ふ言はなかつた。
も内緒にして、使を遣つ
て、親達にはどうあし
て、
仰せられた言葉
なく連れて
て御陵
申したと言はれたので、
宮さいまして
しく思ひ
しちがひの言葉の仰しやりやうもなく、
私の思ふ
方へ引取られることをひどく厭がつて居る
ものを、
無理に
引取られたから、
私の生母
の姫君の
様、
事
に
連れ出して、遠い兄にしたのであらうと、
おあ

きらめいて、傍くに帰り、遊ばされた。

そして最後につもり溜きたち、子達知らせを

よと信じやつたのも、雑つた女達にあつて、面倒

の絶えずであつた。宮は、また信部のもとをおそ

れられたが、紛れ、あるいは、あつたので、あ

つたら若者のお供をと、お可愛ゆいお姫様を思

もつて、思ひ、地獄の底も思ひ

く、なつて、母君を嫁に思はれ、ちが、今は、さ

やうの心位を、

に嫁を言てらくと思つて、入らつしやつたのが、

すつかりきてしがはづれたので、り情しく思ふ

たの

その年に成れに人が生まつてきた。姉弟の

お姉弟は別別の

きせ抱なり成の女のあや維兒なども、大層改しく

ふ年なく、情快さうに抱るなので、何一つ不足に思

やかで、弟に比べ、同じ同じ教まれて、男兄

の仕事で忙しいと言ふ、尼弟を孝

つてきなさるとは

思ひ出しても

もとく

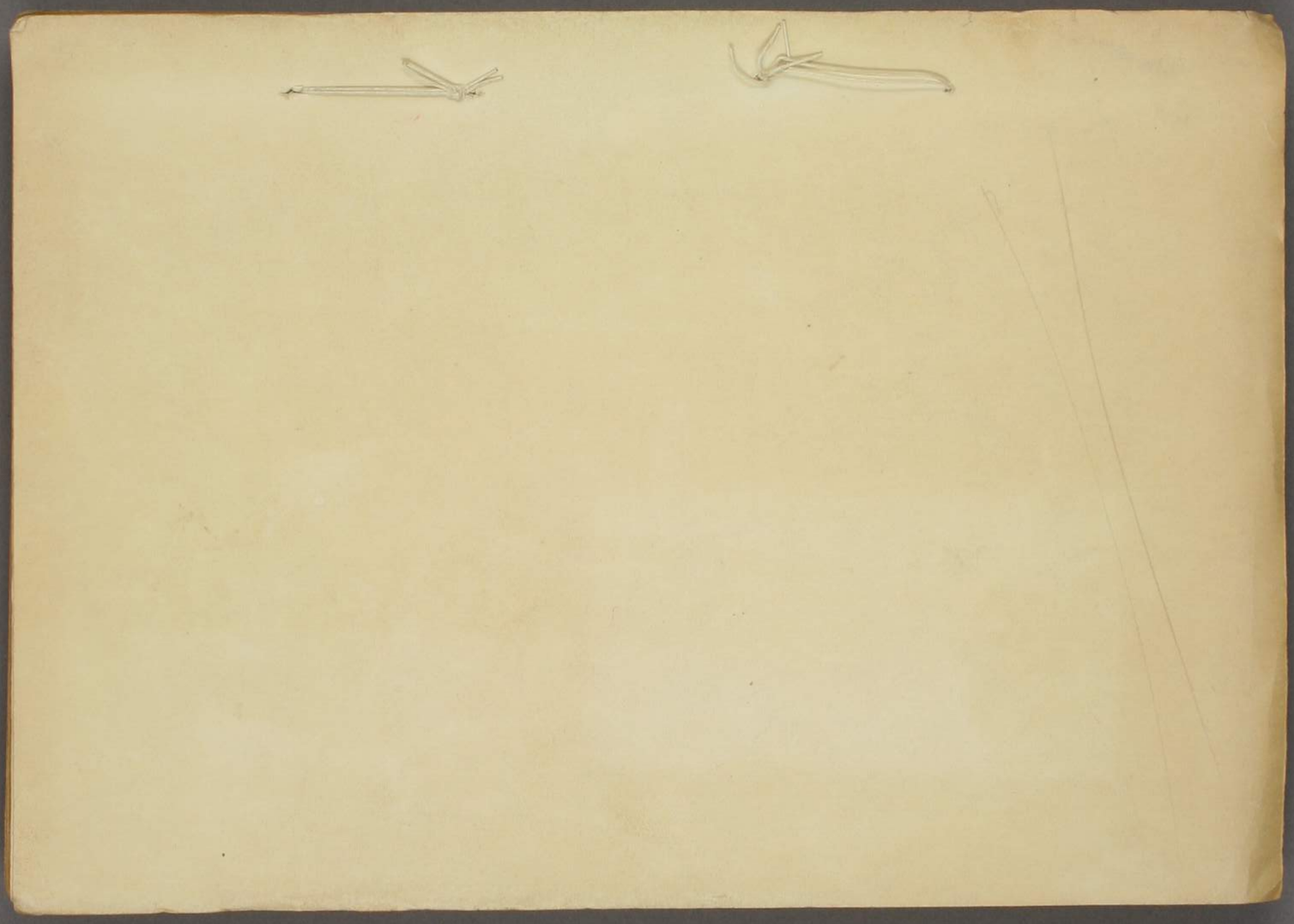
にち暮らし別れにならつてまちのので、今は明治廿
の後、第二の子供を此の上なく愛しいものにし
て附き添はれる。男が修業から帰りたなる
と、吾先にと先びまして、しやべくとおしゃべがあ
り、時々は夫のお傍に抱つこをどしてもつても
強く私のいとけない子供のいとりの風で、まづ
第一番と云つては、最上等新のものであつた。こ
れが生長して女になり、生来心が生まれて愛情がむ
づかしく絡繋つてゐるやうになり、男
の心持も多少変つた情意かもて来たはやめかも

心配されるし、また女の方も男を恨みかちになって、嫉み、いさかひ、泣く、わめく、などしよ意味の事も、自然出て来るものであるが、そんな心形が紙屋もちろく、裏に面白い玩弄である。また

なるの関係として、それみの娘をでて、それ紙の事になること、遠者ろく振乗れて、隔てぬ仲きMーすぐらは、とうて出すぬ袋であるが、それは天正年数の移りの変はつい、必ず怨ぶりのかしつき影さ、せ弦材料であると、浮世絵へくく和合くらべて入らうしやうしい。

第三十五号記約
二月十日発約十五号

止

名口色澤京氏物語用箋 一

昭和六年度用物語